



## 企画展 沖縄の『ころ』 追悼—大田昌秀と儀間比呂志展

5月29日(火)～7月7日(土)

6月23日の沖縄慰霊の日になんで「ピースあいち」では毎年沖縄をテーマにした企画展を開いています。

11回目を数える今年は…。

「日本にとって沖縄とは何か」—この重い言葉を残した研究者、元沖縄県知事の大田昌秀さん。苦渋や悲しみに満ちた沖縄人を描いた版画家の儀間比呂志さん。沖縄の歩んだ歴史とそこに暮らす人々を表現し、多くの人々のころをとらえた二人は、昨年、相次いで亡くなりました。二人が伝えたかった沖縄のころと沖縄の課題にどう向き合えばいいかを問います。

大田さんは沖縄戦で日本軍に動員され、戦場にいました。この体験が後に平和を希求する原点でした。知事時代には、基地のない沖縄の未来像を国に示し、実現を求めました。沖縄の那覇市に生まれた儀間さんは、大阪で洋画と版画を学びました。1956年、戦後初めて沖縄に帰り個展を開きます。沖縄を描く必要性を感じ、沖縄戦・沖縄(琉球)の風物・民話等を多くの絵本にします。今回展示するのは、ハンセン病の妹とその兄を描いた絵本『ツルとタケシ』の原画19点と沖縄戦と沖縄の風物を描いた版画4点です。人々の喜び・優しさ・悲しみ・怒りが見事に表現されています。



大田昌秀氏(2008年5月29日、名東文化小劇場ホール)



儀間比呂志文・絵  
絵本『ツルとタケシ』

### ●関連イベント(参加無料、入館料必要)

#### ◆6月2日(土)

13:30～ 講演「高江報告」

大月ひろ美さん  
(元青年劇場女優)

14:00～ 映画上映(要事前予約)

「標的の島 風かたか」  
三上智恵監督最新作、  
119分



©「標的の島 風かたか」製作委員会

#### ◆6月23日(土) 慰霊の日

13:30～ 朗読の会「オリブ」の群読:平和の詩  
講演「大田昌秀の見た沖縄戦・儀間比呂志の感じた戦世(いくさゆめ)」

阪井芳貴さん

(名古屋市立大学大学院教授)

## 企画展 「杉山千佐子追悼 名古屋空襲と戦傷者たち」

開催中 ～ 5月19日(土)

一昨年9月に101歳で亡くなった杉山千佐子さんの人生を一本の軸に、1945年3月の3回の名古屋空襲の実態と、戦後、杉山さんが始めた「戦時災害援護法」の制定運動(=戦災で死傷した民間人にも国家補償を求める運動)を紹介しています。杉山さんは、この運動は平和運動だと強く意識していました。「私たちだけでなく、後の国民が国に簡単に踏みにじられることのないよう、その人権を保障した法律であると思っている」と、著書で語っています。しかし、ドイツをはじめヨーロッパで一般市民の救済が進むなか、日本で

は国会も裁判所もその道を閉ざしたままです。

市民に消火義務を課し避難を許さなかったため、多くの犠牲者を出した「防空法」についても、実物資料とともに展示しています。

### ●これからの関連イベント

4月14日(土) 13:30～15:00

講演会「杉山千佐子とは何だったのか」

岩崎建弥さん

(全国空襲被害者連絡協議会副運営委員長)



## 写真展『辺野古・高江のたたかい～本土では見えないほんとうの姿～』

5月29日(火)～7月7日(土) 2階プチギャラリー

沖縄は過去に類を見ない状況に置かれています。横行する米軍機の訓練と事故、心無い人間によるヘイトやデマの流布、そして辺野古新基地工事の強行など…。本土からは、今まで以上に、沖縄の現状がきちんと見えなくなってい

るのではないのでしょうか。

今回は、現地の方々が収めた写真を通して、辺野古・高江の風景、そして座り込み運動とそれに対する政権側の行為がどんなものか、その「ほんとうの姿」を見つめ直します。



昨年の展示から

## 「福島原発大事故」～7年後、避難者のいま～

展示中 ～ 4月14日(土)

福島原発事故から7年目を迎え、福島に関する報道は減り、何もなかったかのようです。しかし避難者は今も7万人を超え、愛知県にも福島からの避難者が570名います。この人々には今大きな問題が起こっています。昨年4月、国は年間20ミリ・シーベルト以下の地域の規制解除をして避難者の帰還を促しました。しかし避難者にとって、7年経っても事故は昨日の続きであり記憶から消えることはありません。まして、子連れで故郷を捨てた母親たちは子どもの未来を考え、帰還を決断できません。

福島原発周辺の地域は現在、どのようになっているのでしょうか？ 人々の生活はどんな状態におかれて



いるのでしょうか？ 福島原発事故によって故郷を追われ、避難している人たちを写真に収めている菊池和子さんの写真展です。

(協力：チェルノブイリ救援中部 菊池和子)

夏の特別企画展の準備も始まっています！

## 今年も高校生が描くヒロシマと丸木位里・俊「原爆の図」

7月24日(火)～9月2日(日)

『高校生が描く原爆の絵』を名古屋に

被爆体験者の証言を、孫のような年齢の高校生たちが聞き取って一枚の絵を描き上げる、そんなプロジェクトをご存知でしょうか。広島市立基町高校でこの取り組みが始まって10年が経ち、描かれた絵は116点。思わず息をのむような力作ぞろいです。

生徒たちは1年かけて10回ものインタビューを行い、何度も何度も描き直し、想像を絶する光景を懸命に表現してゆきます。その過程で、知っていたつもの広島原爆が「目の前のこの人をこれほど苦しめた原爆」となって、自分の意識を大きく変化させた生徒たちは口を揃えます。そして、自分には「伝え続けなければならないこと」ができました、と。この夏、「ピー

スあいち」にその絵がやってきます。

原爆の図展 今年も「母子像」

今回の原爆の図は第11部《母子像》です。ピースあいちでの原爆の図展としては4回目、6作目となります。

家の下敷きとなり、燃えさかる中を、親は子を捨て、子は親を捨て、夫は妻を、妻は夫を捨てて逃げまどわねばなりません。それがほんとうの原爆の時の姿なのです。だが、そうした中で不思議な事に母親が子供をしっかりと抱いて、母は死んでいるのに子供が生きているという、そんな姿をたくさん見ました。

(『原爆の図』詞書より)

原爆の惨状を自ら見た丸木夫妻が描いた原爆の図と、それから半世紀以上隔てて、現在の高校生たちが被爆者の話を聞きながら描いた原爆の絵とが並んだとき、何かが響きあうかもしれません。



展示作品より、左「消えていった幼い姉妹…生きていてほしい」中須賀愛美、2010年、右「死んだ我が子を背負う若いお母さん」津村果奈、2015年



原爆の図第11部《母子像》、1959年、屏風四曲一双、縦1.8m×横7.2m

部分

## 平和を守るつながりを求めて

### ピースあいち「戦争体験語り継ぎ手の会 リボン」活動開始

昨年9月の「語り継ぎ手の会結成のつどい」で、会の結成と参加登録者・事務局メンバーを確認し、11月18日には第1回例会を開催しました。語り手の会会員、田邊登志夫さんの語りを聞いた後、登録会員と事務局のメンバーが対面で面談し、①語りをする②語りの準備のため内容を文字化する③シナリオ作成・朗読での語り継ぎ活動へ参加するなど、会員個人の希望に応じた活動の方向を見つけました。また、会名の略称を“つながり”をイメージして「リボン」としました。

その後、可能な方から順次個別の活動を始めており、3月24日には、第2回例会を開催して「リボン」会員による発表・学習会をしました。椋山女学園高校放送部による「杉山千佐子の戦争体験語り継ぎ」の見学もしました。また、他の高校でも、戦争体験語り継ぎ活動への動きがあります。どの学校にも70余年



前には、学徒動員、空襲などの歴史があり、現役の生徒が先輩の戦時体験を“語り継ぐ”ことは、地域での語り継ぎ活動を継承し、一層広げることになります。協働・支援したいと思います。

(語り継ぎ手の会事務局)

### 歴史を繰り返すな—モノは語りかける 第5回寄贈品展を終えて

2017年12月8日(金)～2018年1月18日(木)



期間中、66人の方から寄贈された資料420点を展示し、375人が見学されました。

「戦争の悲惨さもさることながら、国民が戦争に協力させられていった様子もわかります。父の形見を大切に扱っていただいており感謝しております」(大阪市63歳・男) 「皆さん、よく残しておられたと感心しました。平和のために歴史資料として大事なものは残したいものですね」(名古屋市67歳) 「よくぞ残されたと感服いたしました。これを後世に伝えねばと思います。」(名古屋市79歳)

今年は戦後73年。「民主主義の危機と戦争の不安を感じる」という声が聞かれます。「歴史を繰り返すな」と、モノは私たちに語りかけているようでした。

### 「戦争の中の子どもたち」と 「戦争と動物たち」展

1月24日(水)～2月17日(土)

たくさんの小中学生の来訪があるこの時期は毎年、「子どもたち」展を開催しています。今回は、子どもたちの感想を紹介します。

・文ぼう具や遊びなど、すべてが戦争のものだと知り、今では考えられないです。(11歳男) ・焼夷弾の大きさや食べ物が分かった。かるたで「ニホンハキツイ ヨワイシナ」と書いてあったけど「シナ」は中国でびっくりした。(11歳男) ・昔の学校はうんどうじょうに畑をつくっていたのをしりました。せんそうの時はどのようだったのかがわかりました。教科書がすみでぬられていた。いなかにかいして、そかい先で、ノミなどに血をすわれながらも生活していたなんて思いませんでした。(9歳) ・着ものに戦争の時のひこうきやせん車の絵がかいてありました。せんそうはとでもさんこくだということがわかりました。せんそうがおこらないためにがんばっていきたいです。せんそうをするのではなく、世界を平和にして



いきたいとおもいました。二どとぜったいにせんそうをしないようにみんなといっしょに何かはなしたいです。(10歳)

## 平和へのメッセージ

戦争に負けて以来、日本は武器を持って外国と戦闘行為をしたことがない。人を殺したこともない。70年余り、平和が続いている。しかし、争いをしていたころには、敵味方の大勢の人が命を落とし、ケガをし、悲惨な生活を強いられた。この欄に登場していただいた皆さんには、そうした争いのうち、自らが見聞きした戦争を語っていただいた。その中身が真実であるがゆえに、迫力があり、訴えかける力がある。かつて戦争があったことを思い出させる「平和へのメッセージ」になっている。

### 今日ここではないにしても

三嶋 寛

(年金生活者・元文芸同人誌「遊民」同人)



1945年、敗戦の年、私は国民学校一年生、大垣郊外へ縁故疎開をしていた。連日、空襲警報が鳴るなか、ある夜、名古屋が燃えているというので小高いところから見た。名古屋といえば遠い大都会と思っていただけに、南東の空が無音のうちに赤々と広がっているのが不気味だった。

それから2ヶ月もしないうちに今度は岐阜が燃えているという。赤い空がより近く広く迫り、炎が揺らめいたり、黒いものが吹き上げられたりするのまで見てとれた。

そしてその月の終わりには大垣が焼かれた。今度は見物どころの騒ぎではなかった。命からがら防空壕のなかで震えていた。郊外とはいえ、近くの紡績工場が軍需工場になっていたこともあって、空襲は

熾烈であった。

警報が解除されて外へ出てみると、私と母が肩寄せ合って住んでいた掘っ立て小屋はなんと半焼の被害だった。疎開先で焼け出されたのだ。

こうした思い出は私のなかである種の教訓として反芻される。

当初、戦争は遠いところのものだった。しかし、それらは次第に近づき、ついには自分の頭上に降りかかることになるのだ。いまはここではない。しかし、そう思っているのもつかの間、明日にはここへと至るのだ。

### 「平和」だからこそ生きてこれた

山田茂里夫

(愛知詩人会議事務局)



昭和二年生まれの僕は、軍国少年として育てられました。

昭和十九年七月、海軍の予科練に入隊、翌年の八月十五日(敗戦の日)を、第二河和航空隊布土支隊で迎えました。あのときの、夢が覚めて「生き残った」という何とも言えない気持ちは、復員して家に帰ったときの、母の涙とともに、今も夢に見ます。

九十歳になりました。

このところ五感の衰えが著しいのです。左眼はほとんど見えません。耳には補聴器、鼻は全く利かない、味覚はどうやら保っていますが、頭はほとんど働

きません。今日が何日だか、今朝の新聞を見て確認します。ところが、店番しながら領収書を書くとき、今日の日付が出てこなくて、お客さんに聞くという始末です。それでも、今は「平和」だから生きていられるのだと思っています。

八月十五日、今年もこの集落の随縁寺で、「平和の鐘」を撞きます。世界に冠たる「平和憲法」を守らねばなりません。誓いを新たにします。

## 戦後を語る

昭和17年生まれの後期高齢者です。終戦の年はまだ三歳で、戦争体験をリアルに語ることは出来ません。但し、戦後の貧しい生活は覚えています。今も貧富の差はありますが、終戦後は日本中の人食べるものに困っていました。私は戦後直ぐ、母の実家の農家に身を寄せてひもじさをしのぎました。給食は進駐軍から差し入れされたコッペパンと脱脂粉乳でした。

爆弾で焼けた学校もあってひとつの学校におおぜいの子供が集まって、小学校二年までは授業が午前中と午後に分けて行われました。父親が戦死したため母子家庭がかなりありました。私も母子家庭でし

### 戸田鎮子

(同人誌主宰)



たが、父は昭和19年に病死しました。医薬品や食料もない時代だったので、やはり戦争のせいだったと思います。

小学生の頃、学校から「ひめゆりの塔」とか「原爆の子」という映画を見に行きました。「私は貝になりたい」という映画も作られました。今はそういう映画も小説も作られません。戦争や戦後を語れる人もだんだんと高齢化しています。当時の写真や手記を大切に保存しなければならないと思います。

## 三月十日の東京大空襲に遭う

昭和二十年三月十日、小学校六年生の私たちは卒業のため学童疎開から東京に帰ってきました。建物疎開でがらんとした駅前に整列し、校長先生のお話の途中、けたたましいサイレンが鳴ったのです。空襲警報でした。迎えに来た母と急いで帰宅しました。夜になるほど空襲は激しさを増していったのです。

その夜、三月十日の東京の下町の空は凄まじいものでした。怖いもの見たさに防空壕からちらっと外を見ると、空は真赤、ひゅうひゅうと音を立てて焼夷弾が落ちて来ます。わが家の瓦屋根にはその破片と、高射砲の薬莖がからからと音をたてて降っていました。

翌朝、幸いにわが家は無事でした。母は国防婦人会で罹災者の救護のため、千葉街道へ出て行き私もついて行きました。それはもうあの「原爆の凶」と

### 宮崎玲子

(葵美術グループ)



そっくりの光景でした。ずぶ濡れの人、血を流している人、リヤカーで残りの荷物を引く人、胸がどきどきしたことを今ははっきり思い出します。

名古屋に住んで約半世紀になりますが、時折友人から名古屋の空襲の話聞かせてもらいました。この地でも激しい空襲があった生々しい話を聞きました。

戦争って何でしょう。人殺しはいけないということは誰でも知っていることです。けれど黒い影がしのび寄る気配を感じるこの頃です。過日孫の結婚式があり、友人の若者たちが賑やかに盛り上げていました。この子たちは絶対に戦争という悪魔の手に渡してはいけない。心からそう思ったのでした。

## 203高地で考えたこと

1月、旧満州(今の中国東北部)の大連、旅順、203高地を旅行した。日清戦争で日本が清から譲り受けた遼東半島の最西部に位置する軍港が旅順である。その軍港を一望できる203高地と呼ばれる丘陵。

日露戦争での旅順の攻囲戦は、死傷者6万人(死者2万人)という。激戦の果てロシアの降伏に終わった。海拔206メートルであったが激戦のため土が削られ203メートルとなり「203高地」と命名されたとか。戦いが終わり、両国の会談が行われた水師營の資料館(復元)で、2万人の死体が累々と重なった写真を見た。元々は海拔200メートルだった場所が、うずたかく積まれた死体により3メートル分盛り上がり上がったのではないかと。わたしはそんな妄想にとりつかれた。日本の乃木、ロシアのステッセルその他の要人

### 桐生 久

(文芸同人誌『矢作川』主宰)



が納まった写真の中にひとり腰砕け状態のロシア人がいた。二日酔いのため立つこともままならなかったという説明であった。手塩にかけた息子が徴兵され、異国で無惨に殺され、敵味方関係なく積み上げられた死体のひとつになって果てる。銃後で「行け、行け」と死に向かって突進させた司令官たちは戦が終われば泥酔するほど飲み交わす。これが戦争なのだ。

権力者や金力者に踊らされてなるものか。この思いの実行は「9条を守る」というスタンスに立つ人に1票を投じることしかない。と、つくづく考えさせられた203高地であった。

## 開館10周年記念募金達成のお礼

昨年5月から12月まで募金をお願い致しましたところ、1185万円のご寄付が集まり、目標額(1000万円)を大幅に超えて達成できました。会員、支援者、ボランティアの皆様のご協力、呼びかけ人様のご尽力の結果と、深く感謝しお礼申し上げます。

資金は、①建物等の傷み補修 ②3階展示室の

壁・照明改修 ③3階倉庫内の棚の設置 ④ホームページの刷新 ⑤10周年記念誌『希望を編みあわせる』の発行に充て、残余は今後の活動資金としてNPO本会計に繰入れたことをご報告申し上げます。

(開館10周年記念募金委員会)

## 教科書に見る日本国憲法

10月から2月末には、学校から団体で来館する小、中学生の姿を多く見かけます。その際「戦争の中の子どもたち展」が開催中であれば、自分の力でパネルを読み取ることもできます。しかし、2階の展示はむずかしく、どうしてもガイドの話をお聴く時間が長くなりがちです。そこで、プチギャラリーに「教科書に見る日本国憲法」のコーナーを設け、教科書を拡大したものを見られるようにしました。今後も子どもたちがより身近に感じることのできる展示を増やしていけたらと思います。



## 第33回戦災・空襲記録づくり東海交流会開催

昨年12月17日、「ピースあいち」で東海交流会が開催されました。岐阜からは大学生と協力して制作した空襲後の写真を現在と比較する立体映像「岐阜空襲アーカイブ」の活用について、南山国際中高校の馬場豊さんから『戯曲 捕虜のいた町一城山三郎に捧ぐー』の出版のいきさつ、清水啓介さんから長年の研究成果を集約した『東海軍管区の防空陣地』の発行など中身の濃い報告がありました。交流は23団体50名の参加でおこなわれました。



### 好評です！『10周年記念誌』

延べ75人のボランティアたちが登場し、賑やかに「ピースあいちの10年」を語っています。また開館以前、1993年からの資料館建設に向けた市民運動の歴史も総括してあり、好評をいただいています。



### 開館11周年

### ピースまつり2018

5月6日(日)11時~16時

一日無料開館します。オカリナ演奏、バルーンパフォーマンス、朗読などの楽しいプログラムにどうぞご家族でご参加ください。展示ガイドも行います。

前回の様子



シリーズ  
平和を守る仲間たち② 豊田市 平和を願う戦争展

「あのように悲惨で残酷な戦争は、日本でも世界中どこでもあってはならない。」という戦争体験者の声を、加害と被害の両面から、この豊田の地でも語り継がねば、という思いで「豊田市 平和を願う戦争展」を開催してきました。

1997年に、新日本婦人の会の数人の母親たちが、「唯一の被爆国である日本の母として、あの原爆のことをちゃんと子どもたちに伝えておかななくては」と話し合っ、ささやかに、しかし、たいへん熱い思いで原爆パネルの展示を中心に開催した第1回。その後、多くの方たちの賛同と支援の輪が広がり、銀行や郵便局のロビー展示も行わせていただきながら継続し、実行委員会形式となって、毎年夏の開催が定着し、昨年は30回目を開催することができました。今夏31回目は8月25日、26日の両日、「豊田産業文化センター」で開催予定です。

豊田市内各地域の戦争遺跡を訪ねる「平和リレー講座」の調査をもとに、郷土の戦争時の出来事を展示していることも大きな特徴です。このことで先の戦争をより身近に実感できたという感想が寄せられています。戦争体験を聞く会や絵本の読み聞かせ、映画の上映などを併せて行う中で、「戦争はだめ、平和でこそ」の思いを市民と共有したいと、継続の意義を実感しながら、今年も開催に向けての企画を進めています。詳しくはホームページをご覧ください。

(豊田市平和を願う戦争展実行委員会 篠田 木末)



ボランティアの窓

楽しく関わっていききたい

岩男 涼



私は幼少の頃より戦争史に強い関心があって、ついには大学で専攻するほどになり、せっかく大学で専門的に学ぶのだからもっときちんと学びたいと思い、「ピースあいち」のボランティアに応募して関わり始めました。10周年記念パーティの司会や語り継ぎ手の会など、さまざまな活動に楽しく関わらせていただき、経験を積むことができたと思っています。

最近「次世代交流チーム」が設立され、私も次代の「ピースあいち」を担う一員として参加させていただいています。まだ大学生で、時間などの観点で制約があるので参加できる機会も少ないですが、あまり気張りがすぎず、自分のできる範囲で楽しく関わっていききたいと思っています。

もっと平和になっていたはずだった

宮木 明代



私、74歳、ボランティアを始めて8カ月です。私に勧めてくれた人、この館長ご夫妻が私の高校の同窓生だったことで、あまり迷いはありませんでした。私の夫は脳梗塞の後、週3日リハビリに出かけています。月に2回ぐらいのボランティアは可能でした。

始めて6カ月ぐらいは、展示の内容を理解するのが精一杯でした。私はいわゆる戦中派です。時代の空気は分かっているけど詳しい知識はなく、忘れていたことも多くありました。今この年になって振り返ると、「もっと平和になっていたはずだったのに」という思いがつか上がってきます。「私は生活するのが精一杯だった」と言い訳と反省をしつつ、今ここ「ピースあいち」で、私より若い皆さんや同年代の方々が平和の活動を地道にやっ、ていらっ、しゃるのを心から応援しています。

資料館探訪 20

実物資料の展示  
——愛知・名古屋戦争に関する資料館

2015年7月、「愛知・名古屋戦争に関する資料館」が名古屋市中区に開館しました。公立の施設です。資料館の設立目的は「実物資料の展示を行なうことにより、戦争体験を次の世代に引継ぎ、戦争の残した教訓や平和の大切さを県民が学ぶことにより、平和を希求する豊かな心を育み、平和な社会の発展に寄与すること」です。

4つのコーナーがあり、それに関する実物資料が展示されています。見物は250キロ爆弾の実物(落下したもの)と実物大の模型です。千人針、戦争カルタなどの実物も展示されています。4カ月毎に展示が入れ替わられます。展示資料は県民・市民からの

寄贈品です。『名古屋市平和都市宣言』『平和県宣言』も展示されています。

スペースは広くありませんが企画展も行われています。企画展も4カ月毎に展示を変えています。昨年の夏には『戦争体験談を聞く会』が行われました。ビデオの貸し出しもしています。

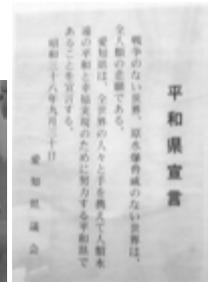
開館してから2年半が経過しました。その間の入館者は19,000人です。

館の建物は1933(昭和8)年に建てられたもので、歴史的価値があり注目されています。展示室の天井の一部には漆喰装飾(写真)で飾られ



ています。建物を見に来たついでに資料館を観ていく人もいるとボランティアの方が教えてくれました。(N)

(写真：愛知・名古屋戦争に関する資料館で撮影)



月一回の発行で「ピースあいち」の活動がタイムリーにわかる「ピースあいち・メールマガジン(無料)」。「ピースあいち」のホームページからお申し込みください!

ぜひ「ピースあいち」の会員に!

開館11年目に入り、戦争と平和の資料館として社会的にも、ますます期待されつつあります。そのような中で、「名古屋空襲と戦傷者たち」が始まり、特別企画「高校生が描いたヒロシマ原爆の絵画」と「原爆の図」展の準備をすすめています。

「ピースあいち」の基本財源は、入館料(大人300円・子ども100円)と会員の皆さんの年会費(正会員6000円・賛助会員3000円)です。来館者数は、開館した2007年は約12,000人、以後は6,000人前後で推移してきました。

現在会員数は919名(正会員362名・賛助会員557名)ですが、「ピースあいち」の年間経費約1,250万円には大きく足りません。不足分は不確定な寄付金や助成金に頼っているのが現状です。自主財源の確立は、まず会員の拡大です。ぜひ多くの方に会員になっていただき「ピースあいち」を支えてくださいますよう、お願い申し上げます。

「ピースあいち」への交通のご案内



【ピースあいちの利用案内】

- 開館日 火曜日～土曜日
- 開館時間 午前11時～午後4時
- 休館日 日曜日・月曜日・12月26日～2018年1月4日
- 入館料 大人 300円 小中高生 100円
- 常設展示「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」、準常設展示「戦争と動物たち」「戦争と子どもたち」。ほかに、図書や戦争体験DVDのライブラリーもあります。
- 学校や団体の見学で、展示ガイドや体験談を希望される場合は、事前にご相談下さい。
- 駐車場は2台分あります(300円)。他に障がい者用が1台分あります(無料)。

● 編集後記 ●

私は俳句を詠んで21年余になる。その私が昨年の8月から短歌を詠むことにした。昨今のこの国の政治状況について私の思いを語るには、俳句の十七文字では十分に表現できないからだ。そこで三十一文字で詠むことにした。「九条を守れ!」と叫んだ帰り道藪蚊の唸り敵襲と聞く酒酌みて果てることなき護憲論戦知る人知らぬ若者「二度と戦争はしてはならない」「平和は尊い」と仲間うちで語り合うだけでは駄目だ。一人ひとりが声を上げることが肝要だ。デモに参加する。九条の会の運動を手伝う。新聞社に投稿する。「ピースあいち」は、その一端を担っている。(S)